

負債論 貨幣と暴力の5000年

デヴィッド・グレーバー〈著〉

酒井隆史監訳 高祖岩三郎、佐々木夏子訳 以文社 6480円

ラディカルに「神話」を解体

お金って謎。最近ますますわからない。貧乏人向け高金利住宅ローンが準備優良で、それを証券にして売って、なにそれ。

本書は経済学者ではなく、人類学者の負債論。なにしろ事例がおもしろい。ヨーロッパを中心に、古代インドや中国、アフリカや南米の先住民、日本人も顔を出す。借金の正体を求め、法律、神学、文学、哲学と多数の資料の頁をめくりまくる。

たとえば利子。紀元前2、3千年のメソポタミアにはもう有利子貸付が根づいていた。相互扶助こそ人間の証し、あげた肉に礼をいわれるのも上下関係になるから嫌、というイヌイットには信じがたい行いだ。妻子を奴隷として売り飛ばすなんてことが「偉大な農業文明」で横行しただしたのは、まさに貨幣・市場・有利子貸付が始まった頃だ



David Graeber 61年米ニューヨーク生まれ。文化人類学者。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス人類学教授。『アナキスト人類学のための断章』『資本主義後の世界のために』など。

済自由主義はこのへんの誤解に基づいているという。軍事Ⅱ貸Ⅱ奴隷制複合体こそ帝国の基軸、つまり市場を創ったのは兵士に金を払い侵略する国家で、その国家を市場が支えたのだ。古代エジプトの定期的借金帳消し制度っていいなあ、なんていうのは大バカの名なケモノ、返済は絶対だ！って、それも歴史にはひとつの考え方にすぎない。千年後、いまの借金観はどう評価されるんだろうね。

そう。数量化が人間関係から人を引き剥がし、モノに変える。利子の倫理性は大問題だ。イスラーム商人が活躍した中世、ペルシャの神学者ガザリーは貨幣は貨幣を獲得するために造られたのではない、と主張。貨幣を自己目的化する有利子貸付は違法にすべき、という。サブプライムより納得できるな。

キリスト教は同胞への利子を禁止、だが異邦人相手なら容認した。結局利子は常態化、ルタも妥協せざるをえなかった。プロテスタントイズムと資本主

義は最初から手をとりあっていたわけじゃないのね。で、年5%程度ならOKってことになったのだが、この数値、いま各国GDPの成長目標なんです。金で金を生む不道德が、いまやなすべき努力になったのか。

こうして見えてくるのは、貨幣と負債をめぐる神話と思いきみの山だ。中世ペルシャの自由市場論に影響されたらしいアドム・スミスの、物々交換の便宜のために貨幣が生じたという「経済学の創設神話」しかり。国家と市場を対立するものとみなす経

グレーバーはウォールストリート占拠のスローガン「われわれは九九%だ」をつくった人だが、この本の語り口にはラディカルな理念とともに、モンテスキューやJ・フレイザーに通じるひろやかな好奇心が感じられる。この負債の金枝篇は、世界金融危機を背景に建った、タイミング絶好の討論アリーナだ。

評・中村 和恵

詩人・明治大学教授・比較文学